

看護大生のための短期海外研修プログラム
チェンマイ大学短期交換留学プログラム 2019 現地指導教員報告書
宮崎県立看護大学 助手 吹上苑子

私は、2019 年 8 月 18 日から 25 日までの期間、現地指導教員として、学生 5 名（2 年生）に同行し海外研修交換留学プログラムへ参加した。

＜プログラム行程＞

- 1 日目：8 月 17 日 宮崎空港発～福岡空港～スワンナプーム国際空港～チェンマイ国際空港着
- 2 日目：8 月 18 日 植物園、ドイステープ寺院見学
- 3 日目：8 月 19 日 チェンマイ大学の歴史や概要、カリキュラムについての講義。看護学部の臨床実習室とチェンマイ大学看護学部歴史資料館を見学した。
- 4 日目：8 月 20 日 ディベロップメンタルケアの講義
- 5 日目：8 月 21 日 薬物やアルコール中毒の更生施設の見学、講義
- 6 日目：8 月 22 日 産婦人科病棟、分娩室、外来、健康促進センターの授乳クリニックの見学
- 7 日目：8 月 23 日 学びの共有、本プログラムの修了式
- 8 日目：8 月 24 日 チェンマイ観光、チェンマイ国際空港発～スワンナプーム国際空港
- 9 日目：8 月 25 日 ～福岡空港～宮崎空港

事前の学習会では、現地での生活の注意点や渡航前から体調管理を行う重要性を伝えた。

8 月 17 日（土）出発。宮崎から福岡へ移動し、タイ、バンコクのスワンナプーム空港へ、その後国際線へ乗り継ぎ、チェンマイ国際空港へ到着した。空港では出入国の方法やタイでの乗り継ぎの確認方法、タイ通貨への換金方法などを体験。

チェンマイ国際空港へ到着するとチェンマイ大学から本学に短期留学していた学生が出迎えてくれた。学生は、久しぶりの再会を喜びタイ語で挨拶を交わしていた。

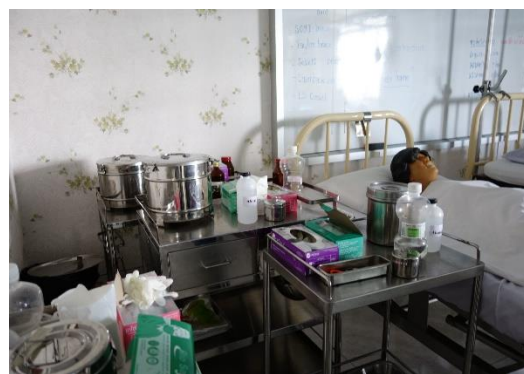


8月18日（日）は、チェンマイ大学看護学生と共に、山頂にある仏教寺院、ワット・ブラタート・ドイステープ寺院を見学した。黄金に輝く仏塔の周りを多くの方々がお経を唱えながら歩いていた。多くの人々の信仰を集めている様子であった。寺院内では、敷居を踏んではいけないとチェンマイの学生から聞き、日本での言い伝えと共通していると学生は感じていた。

午後より、ボタニカルガーデンを見学した。入口には国王の写真があり、移動中も建物の前には国王の写真があつた。1日を通し建物や自然の美しさに触れタイ国民の信仰の厚さや国王の存在の大きさを感じとることができた。



8月19日（月）プログラム開会にあたり、台湾の学生とともに学部長によるチェンマイ大学の歴史や、教育カリキュラムの講義を受け、隣接する看護学の臨床実習室とチェンマイ大学看護学部歴史資料館を見学した。戴帽式の映像をみて本学では戴帽式をやっていないことや台湾ではどうかなど聞いていた。臨床実習室では、キルシュナー牽引や術後患者、心電図モニター、点滴類など看護実践現場を再現した教育環境となっていた。患者の状況をリアルに再現し、情報をもとにアセスメントして判断できるようにしていた。実習室の鉗子立て、鑷子、滅菌包布を見た学生は、これまで学習した看護方法での看護技術を思い出している様子だった。



8月20日（火）、ディベロップメンタルケアの講義に参加した。早産率は、世界的に増えておりタイでも増えていることが理解できた。保温、快適な睡眠環境作りや栄養管理に加え、タッチケア・ホールディング、カンガルーケアなど肌と肌の触れ合いを大事にしていることや家族のサポートを行っていることを知った。母乳育児はハズ・オフが近年推奨されていることを知った。母乳育児支援で使用する新生児の模型をタオルやボールで作成した。実際の新生児の大きさに近似している上、簡単に作れ、低コストであるため実用的なものであると感じた。

午後からは、敷地内の保育園を訪問。タイでも働く女性が増え、看護師の子供を預ける場所であった。これまで、タイの辛い食文化に触れ、子供達も辛いもの食べているのだろうかという質問をしていた。2歳から辛いものを食べていると知り、驚いている様子だった。



8月21日（水）は、薬物やアルコール中毒の更生施設へ行き、講義を受け、施設内見学を行った。チェンマイ大学の4年生が実習をしており、ストレスのセルフマネジメント、予防の集団教育を行っていた。運動してどうだったか、家に帰ってできそうかの問いに利用者から前向きな反応が見られた。本学学生も利用者の言葉だけでなく表情の変化にも注目しその意味を考えているようであった。

8月22日（木）は、午前中にタイにおける母乳育児に関する授業をうけ、母乳栄養が子供の発達へどのような影響があるか説明をうけた。講義の中で、迷信や夫の出産準備・育児参加はどうか、タイの先生方、台湾の学生たちと意見交換を行った。他に産婦人科病棟、分娩室、外来、健康促進センターの授乳クリニックを見学。乳児の人形を抱きながら母乳育児指導をうける母親体験を行った。看護の対象を母親や児だけでなく家族全体の健康をサポートできるように配慮されていることに関心を寄せていた。



8月23日（金）は、これまでの学びを共有した後、本プログラムの修了式が行われた。

8月24日（土）は、チェンマイ大学の学生とエレファントキャンプを訪れた。8日間、チェンマイの学生の友好さに触れ感謝と寂しい気持ちで、チェンマイ国際空港を出発した。

この間、現地教員として、日々の学生の健康状態の確認を行った。学生自身、衛生面に気を付けながら自己調整を行っており、判断に迷った時は教員へ相談することができ、大きく体調を崩すことなく過ごせた。またプログラムへ自発的に参加できるように学習予定の確認を行った。講義では、日本の医療の状況などイメージしにくいところは、補足説明を行った。その説明をもとに意見交換を行う姿がみられた。

なお、チェンマイの寺院や歴史博物館を訪ねて、タイの歴史および文化を学習する機会となった。また、実際のタイの生活様式に触れることができた。文化や生活の違い、価値観の違いを知ることで私自身がより広い視野で対象をみることに役立てるのみならず、学生が対象の生活や文化の違いを感じ取りながら、対象理解を深められるような教育実践につなげていきたい。



現地研修報告書

令和元年度「韓国研修プログラム」

宮崎県立看護大学 講師 壹岐さより

地域貢献等研究推進事業（教育支援・国際交流推進事業）「看護大生のための短期海外研修プログラム」のうち「韓国研修プログラム」に現地指導教員として参加した。本プログラムには、2年生7名が参加した。研修プログラムに参加した体験内容と学びについて、以下に報告する。

I プログラム行程： 参加学生2年生7名

9月4日（1日目）宮崎空港－仁川空港着、空港鉄道にてソウル駅へ移動、KTXにて光州市へ。朝鮮大学教員、学生らとともに夕食交流後、ゲストハウスにチェックイン

9月5日（2日目）サンム病院、朝鮮大学病院見学、朝鮮大学施設見学及び交流会

9月6日（3日目）光の村女性病院見学、5.18 民主化運動記録館訪問、楊林洞近代歴史村訪問、KTXでソウル市へ移動、龍山駅でホストファミリーと合流

9月7日～9日（4～6日目） 終日自己研修

9月10日（7日目）韓方博物館訪問、汗蒸幕体験または自己研修後ゲストハウスへチェックイン

9月11日（8日目）仁川空港－宮崎空港 空港にて解散

II 現地指導教員としての体験内容と学び

1. 光州での体験内容と学び

1) サンム病院・朝鮮大学病院の見学

光州市にあるサンム病院では、整形外科の医長より手に関する講義を受けた。手は進化の過程で拇指が離れ、小指球が小さくなることで細かな動きを獲得してきたことから説明され、それらの部位が障害されることで、今持っている機能の30%を失うことになる。

そのため、手に関する外科処置は非常に重要であることがわかった。

学生達も、これまで学んできた解剖学と重ねながら、理解を深めていた。

朝鮮大学では、ICU や一般病棟、及び産婦人科の分娩室を見学した。この病院の分娩室は、陣痛室と分娩室が分かれている。日本と違う点は、分娩台がないことであつた。陣痛室で使用しているベッドで分娩室に移動し、ベッドが分娩台となるようであつた。分娩室は、がらんとした部屋で、手術室のような雰囲気であつた。日本では、なるべく家庭的な雰囲気になるようにと工夫がされているが、韓国の大学病院ではそのような工夫は見られず、産婦の緊張をほぐす工夫がどのようになされているのかが気になった。





2) 朝鮮大学見学

朝鮮大学の施設内見学では、患者の状況設定に応じたバイタルサイン測定や静脈内注射のシミュレーションモデルの紹介があった。学生は、実際に脈拍が計測できたり、言葉を話したりするモデルにとっても驚いていた。バイタルサイン測定等のモデルについては、臨床実習を終えた後の振り返りなどでも活用し、学生の理解を深めるためにも使用しているということであった。実習で出会った場面に近い状態を再現しながら振り返りを行えるという点では、知識や技術の定着を高められると感じた。一方で、静脈内注射のシミュレーション教育では、腕だけのモデルでコンピュータによって技術の評価が行われるため、対象の観察や言葉かけなどを考えながら看護技術として展開する本学の教育の良さも感じることができた。



3) 光の村女性病院見学

光の村女性病院は、朝鮮大学病院の産婦人科と違い、とても明るくやわらかい雰囲気の病院であった。韓国の文化である産後ケアが充実しており、施設のいたるところに母親への心と身体への配慮を見て取ることができた。韓国の出生率は1.11%と非常に低いですが、この病院の新生児室にはたくさんの新生児が入室しており、また産後棟の病室もほぼ満床であった。妊婦が通る廊下には、かわいい子どもの写真が掲示されており、看護部長からは「妊婦のリラックスを促すために飾っている」と説明があった。産後の病室には座浴の機器が設置されており、細やかな部分にも配慮がされていた。



韓国では、産後母児分離となり、母親の心身の回復を最優先に考えていることがわかった。日本の産後は母児同室であり、それは母子関係を築くためにも大変重要なケアではあるが、母親の産後の疲労回復という視点が不十分である。母子同室でありながら如何に産後疲労を回復させていくかについて、韓国の産後ケアから学ぶことも多くあると考えられた。

4) 光州事件記念館見学

光州記念館では、光州事件が起きた経緯、その時の報道のされ方、軍の鎮圧行動の悲惨さなどを学んだ。犠牲となった方々には、子どもから妊婦、若者などが多く、ジオラマや写真などを通して、短い期間におきたこの事件の意味を考えることができた。学生達も、これまでみてきた光州市の穏やかで美しい街の過去に触れ、



「今、目の前にある道路にこんなに多くの人の犠牲や血や惨劇があったなんて信じられない」と歴史を知る重要性を感じていたようであった。

2 ソウル市での体験内容と学び

1) 韓方博物館見学

韓方博物館では、韓国の風土や気候、韓国人の体質に合わせて発展してきた伝統医学「韓方」に触れることができた。博物館に行く道すがらには、たくさんの薬草が売られ、学生達はそれのにおいや見た目に驚いていた。

博物館には韓方に関する文化財150点余りが



展示され、薬草などを粉碎する道具や薬剤を沸かす道具、薬棚などが展示されている。自然の中にある草や生き物たちが薬として使われていたことやガイドから今でもそれらを使った療法も残っていることを聞き、韓国の伝統医療について感じる事ができた。伝統医療について体験できる時間がなかったことは残念であったが、学生達は自分の体質をあてはめたりしながら、生活のあり方が体に現れてくることを実感している様子であった。



Ⅲ. 韓国プログラムを通しての学び

今回初めての韓国訪問であり、また学生の海外研修に参加することもはじめてであった。韓国に行くまでは、韓国人の反日感情のことなど気になることもあったが、ホストファミリーをはじめすべての方々にとても暖かく迎えていただいた。

特に朝鮮大学では、教員の方々が日本の臨床の実際大変興味を持たれており、通訳を通して韓国と日本の周産期の違いがよく分かった。しかし同時に語学力の必要性を痛感することにもなり、自己の課題にもつながった。

隣国でありながら韓国の文化や現状は全く知らなかったが、今回の訪問を通して、韓国の歴史や文化、日本と韓国の違いを感じる貴重な体験となった。

この学びを今後の教育研究や国際交流の活動に活かしていきたい。

平成 30 年度 サンノゼ短期海外研修プログラム

宮崎県立看護大学 講師 上田智之

平成 31 年 3 月 16 日（土）～3 月 27 日（水）の 12 日間サンノゼ短期海外研修プログラムが実施され、引率者として同行した。参加学生は 4 名であり、全員 2 年生であった。初日、2 日目とホストファミリーとそれぞれかかわらせていただいた後、研修プログラムに沿って、日系アメリカ人の歴史、ロストガス高校訪問、サンノゼ州立大学看護学部、日本語クラス、ウェルネスセンター訪問・見学、サンノゼ州立病院見学、観光等実施した。その中で、歴史、異文化体験、アメリカにおける保健・医療・福祉の現状を学ぶことができた。

3 月 16 日（1 日目）

宮崎-羽田-ロサンゼルス-サンノゼと飛行機で、乗り継ぎも合わせ約 16 時間かけてサンノゼに到着した。学生同士でわからないところは協力し、入国審査を通過した。21 時に到着したこともあり、この日は空港にホストファミリーが出迎えていただき、挨拶したあとそれぞれに分かれた。この中で、学生は仕事に対する態度や国民の雰囲気など感じていた。



【羽田空港にて】



【ロサンゼルス空港】

3 月 17 日（2 日目）○ホストファミリーディ

ホストファミリーがそれぞれの学生を観光に連れて行っていただいた。学生は観光することにより、建築物、服装などから異文化を感じていた。ある学生はサンフランシスコのカストロの街に連れっていただき、「いろんな人がいてそれが良い。という意味でレインボーが街のシンボルになっていた。このような街の存在が LGBT の人々の存在を社会に知ってもらい、その人たちも生きやすい社会づくりへとつながった」と感じており、他国における LGBT に対する認識を深めていた。

3月18日（3日目）

○友愛会ボランティア・ジャパニーズアメリカンミュージアム・日本街見学

日系アメリカ人を中心としたデイケアである。利用者は歓迎して迎えていただき、学生が準備した「福笑い」、「お手だま」、「あやとり」、「おりがみ」を一緒に実施した。日本語が話せる方、英語のみの方がおられ、学生は利用者に応じてコミュニケーションをとっていた。そのあと、昼食の配膳のお手伝いを実施し、利用者と昼食をとった。日本街見学では、日系人の歴史や戦争における日本人の差別や努力について説明を受け学ぶことができた。学生は友愛会における食事について「友愛会の食事にニンジンとレーズンを混ぜた食事が出たり、ホストファミリー宅の夕食でサラダにブルーベリーが入っていたり、日本ではデザートやお菓子感覚で食べるものが入っていて、食文化の違いを感じた。」と自分の食文化と比較していた。また日本街では「日本が戦争を起こしたことで、サンノゼに住んでいた日本人がそのような生活を強いられていたかを学んだ。日本では感じられない日系アメリカ人の思いや生活を想像できた」と歴史について学びを深めていた。



【日本街にて】

3月19日、20日（4.5日目）○ロストガス高校日本語クラス

ロストガス高校日本語クラスに参加させていただいた。そこで、日本の紹介、学校の紹介を4回実施した。生徒のレベルに合わせてクラス分けされており、それに応じて英語または日本語で発表した。生徒は日本に関心を持ち、真剣に聞いていた。また、積極的に本学学生にも質問し、学生もまた、生徒に合わせて日本語または英語で説明していた。また、じゃんけん列車を紹介し、大いに盛り上がった。学生は「授業の様子を見て、手を挙げて発表したがっていたり、ゲームを始めたらすごく喜んでいたりしていた。日本の高校に比べ積極的に参加しており、先生の問いかけに対する反応も大きいと思った。」と記述しており、日本に

おける高校や授業の参加態度の違いなどを感じていた。



【ロストガス高校校長と日本語クラス教師と】



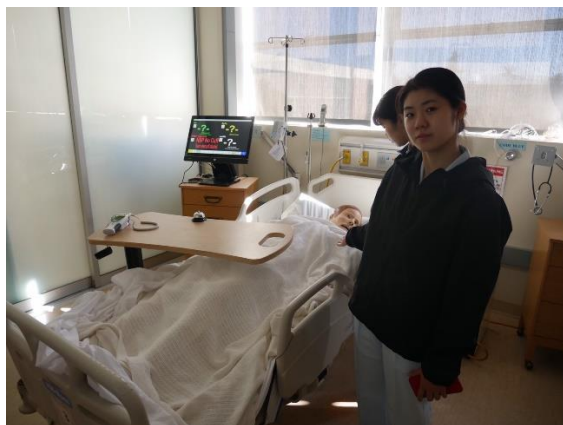
【ロストガス高校日本語クラスの生徒と】

3月21日（6日目）

○サンノゼ州立大学看護学部、外国語日本語クラス、ウェルネスセンター見学

サンノゼ州立大学では看護学部の概要について学生からプレゼンテーションを実施していただいた後、気管切開で人工呼吸器を装着している患者のケアの演習の見学、循環動態が変化した患者、出産のシミュレーション教育の体験を実施した。学生も今まで習ったことと比較して考え、積極的に質問をしていた。そのあとに学部生とともに昼食をとった。学生は「より実践的な練習をしていて楽しかった（見ていっただけで）」、「患者アセスメントを行うときには、私たちのように指定の紙はなく、自分で考えて行っというっていた。授業で先生の方法などを学びながらも自分が患者をアセスメントするのに最もわかりやすくまとめられ、働き始めてからも自分なりにしっかりできそうだった。」と認識し、シミュレーション教育の有効性と主体的な学習の必要性を学んでいた。

日本語クラスでは学生に初めに日本や本学の紹介をした後に、グループに分かれそれぞれお互いの違う言語で自己紹介をしあった。お互いコミュニケーションがとれるようにそれぞれ努力し、距離も縮まっていた。



【サンノゼ州立大学看護学部演習室にて】



【サンノゼ州立大学看護学部の学生と】

ウェルネスセンターでは、大学内にある保健センターであるが、医師、看護師、カウンセラーが常駐しており、1日約150人が受診しているとのことであった。なかでも、対人関係や学習に関することなどメンタル面で悩みを抱えている学生が多いことを学ぶことができた。

3月22日（7日目）

○ウィンチェスターミステリーハウス、ヴァリーメディカルホスピタル見学、ロストガス高校サディダンスパーティー参加

この家は、銃のビジネスで成功を収めた実業家ウィリアム・ワート・ウィンチェスターの未亡人、サラ・ウィンチェスターの個人的な住宅であったが、現在は観光地と化している。このサラ・ウィンチェスターの指示の下、38年後の1922年9月5日に彼女が死亡するまで、実に24時間365日、屋敷の建設工事が続けられた。それに至るまでなどの概要を学ぶことができた。

ヴァリーメディカルホスピタル見学では、施設見学をさせていただいた。日本にない職種や看護方式、体格の違いに伴う労働の安全対策などを実際に見学することができ、国に応じて体制や対策が違うことを学ぶことができた。

ロストガス高校サディダンスパーティーでは学校の創立祝いのダンスパーティーであった。本学学生も一緒に参加させていただき一緒にお祝いすることができた。高校生がダンスパーティーを開催することに学生は戸惑いながらも生徒と一緒に楽しい時間を過ごした。



【サンノゼ州立大学にて】



【サンノゼ州立病院看護師の歴史】

3月23日（8日目） ○ホストファミリーディ

この2日間それぞれのホストファミリーと観光やショッピングをして過ごした。

3月24日（9日目） ○ハリウッド観光、グリフィス天文台観光

サンノゼ-ロサンゼルス空港へ移動した。空港まで見送りに来ていただけるホストファミリーをいて最後までお別れを惜しんでいた。ロサンゼルスではタクシーをホテルの人に依



【ハリウッド観光】



【グリフィス天文台にて】

頼し、蠟人形館、ハリウッド&ハイランド、ララランドの観光をした。学生はタクシーにおいて積極的に不明な点は話しかけ対応できていた。また、観光も積極的行動しトラブルなく楽しんでた。グリフィス天文台観光はハリウッドの景色を一望した。

3月25日（10日目）ユニバーサルスタジオハリウッド

ユニバーサルスタジオハリウッドでは、全員でアトラクションを楽しみ、大きなトラブルなく1日過ごすことができた。



【ユニバーサルスタジオハリウッドにて】

3月26日、27日（11日、12日目）

ロサンゼルス空港-羽田空港

羽田空港へ帰国した。羽田空港から宮崎、伊丹、福岡空港へ体調不良やトラブルなく帰宅し、海外研修を終了した

【おわりに】

今回、サンノゼ短期海外研修に参加して、欧米に行くのは初めての経験であり、不安があったが、学生の積極的な行動や現地コーディネーターの順子さん、ホストファミリーや日本語教師などの方々に支援をしていただきたく研修を終了することができた。

学生のみではなく、食文化、生活文化など私自身も異文化体験をし、学習することができたとともに、視野を拓けることができた。さらに、日本のように島国ではなく、島つながりであるアメリカにおいて、さまざまな人種の方、宗教の方がおり、お互いが理解しあって生活していることができた。そこは、看護の対象を理解し、その人の個別性、生活に合わせた看護につながることに感じた。

現地コーディネーターの支援もあり、実際に日本からアメリカに移住している日本人の方の障害福祉をサポートしている方、認知行動療法を体系化したアーロン・ベック氏の弟子デービット氏から指導を受けカウンセリングルームを開設している方からお話を聞くことができ、アメリカの障害福祉、メンタルヘルスの現状についても学ぶことができた。

障害福祉においては、海外からの移住や障害特性を活かしたサービスを受けやすいような工夫が必要であることを学ぶことができた。また、認知行動療法においては、アメリカにおいても学習や対人関係における不安からメンタルヘルスの低下が懸念されていること、ロサンゼルスは麻薬が合法化されていることもあり、アディクションの支援のニーズが高いことを学ぶことができた。

今後も日本のみならず、国際的な動向も合わせて看護を深めていきたいと感じた。

看護大生のための短期海外研修プログラム
インドネシア研修プログラムプログラム 2019 現地指導教員報告書
報告者：宮崎県立看護大学 助教 河野義貴

インドネシア研修プログラムに現地指導教員として参加した。本プログラムは 2019 年 9 月 4 日から 9 月 15 日の 11 泊 12 日日程で、2 年生 6 名の学生が参加した。

【プログラム行程】

- 1 日目：9 月 4 日 宮崎空港発 仁川空港経由 インドネシア ジャカルタ着
- 2 日目：9 月 5 日 AM/インドネシア最大規模のモスク (Mengunjungi Masjid Istiqlal) 見学
PM/ジャカルタ在住日本人向けクリニックの見学
- 3 日目：9 月 6 日 インドネシア繊維博物館 (Museum Tekstil) ・日本人祭り
- 4 日目：9 月 7 日 インドネシア国立博物館 (Museum Nasional Indonesia)
- 5 日目：9 月 8 日 経済連携協定 (EPA) に基づく外国人看護師受け入れ事業に申請しているインドネシア人看護師の勉強会参加
- 6 日目：9 月 9 日 イッサン看護大学 (Acara tamah ramah dengan mahasiswa Stikes IMC, Bintaro) を訪問
- 7 日目：9 月 10 日 インドネシア大学
- 8 日目：9 月 11 日 国立精神科病院 (RS. dr. H. Marzuki Magdi Bogor) を訪問
- 9 日目：9 月 12 日 バニサレ看護大学 (STIKes Bani Saleh Acara ramah tamah dengan mahasiswa) を訪問
- 10 日目：9 月 13 日 タマン・サファリ (Taman Safari) 動物園
- 11 日目：9 月 14 日 タマン・ミニ (Taman Mini Indah) にてインドネシア各地の伝統的建築物見学
- 12 日目：9 月 15 日 インドネシア ジャカルタ発 仁川空港経 由宮崎空港着

9 月 4 日：宮崎空港発仁川空港経由でジャカルタに入った。仁川空港でのトランジットまでの乗り継ぎ時間 3 時間で学生たちが自ら韓国通貨への換金を行い、英語によるコミュニケーションをとりながら空港内での軽食を食べていた。換金や飲食は学生が自立して体験していた。

9月5日：ジャカルタ初日の朝食時に、現地アテンド員と合流した。プログラムがスムーズに流れるように、自己紹介をセッティングして、事前学習の再確認と補足説明をしていただいた。朝食を食べながら食事や飲み物の注意点などのオリエンテーション、現地の人たちの特徴から国の特徴を知り、学生の戸惑いを小さくしつつ異文化に関心が深まるような会話をを行った。

正午、インドネシア最大規模のモスク Mengunjungi Masjid Is tiqlal にて礼拝の様子やモスク内の施設見学を行う。ガイドの解説を聞きながらモスク内を見学し、イスラム教徒の姿を実際に見ることが出来た。インドネシアのイスラム教は多種の宗教の共存を認める考えがあることなどの説明があり、宗教に関して国際的な問題が頻発することを知る学生にとってはインドネシアのイスラム教徒の寛容さを知る機会になった。

午後、異国で長期間生活する学生の不安を軽減するため、体調不良時に受診予定の病院、偕行会日本人クリニックを見学する。インドネシア人のスタッフより日本語で問診、レントゲン検査など説明を受ける。現地アテンド員より、文化的背景を解説していただいた。インドネシア人の考え方の特徴として「人間は失敗をするものであり、それを断食で洗い流す」という宗教的考えがあること、その考えにより、他人に対しても自分に対しても寛大な気持ちを持っている。しかし、一緒に仕事をすると不十分な側面が多くあり、仕事を忘れるミスや時間を守ることができない事を聞くことができた。学生は「日本人がしっかりとまじめに働くのはよいことだと気が付いた。しかし、まじめすぎて苦しくなる人もいますので、多少はインドネシア人のように人を許し、自分を許す気持ちも持って良いと思った。」ととらえていた。



モスク Mengunjungi Masjid Is tiqlal



9/6 織物博物館・日本人祭り

生活、特に「衣」に関連する伝統文化について学ぶため、織物博物館にてロウを溶かして布に模様を描き、その布に色付を行うバティック体験をした。途中でロウが多く垂れて、思い通りに描くことができずに失敗が多い体験になる。現地の人が作成したバティックに繊細な模様が描かれているのを見て学生は現地の人の技術の高さに感動していた。

インドネシアにおける日本文化・日本についてのイメージなどを体感するため、夜、日本人祭りに学生は浴衣を着て参加した。そこで、学生は「浴衣を学生同士で着付けて祭りに参加した。インドネシア人から一緒に写真を撮ってほしいと日本語で誘われた。浴衣の力、魅力を感じた。」「たこ焼きを買おうと並んだ。すると、順番に買うのではなく、先に言った人から頼んでいて、せり市のようなと感じた。日本人の行列は外国人に称賛されることが多いが、それがなぜかわかった。並ぶことが世界共通の仕組みではないことが知れた。」と感想を述べた。



織物博物館でのバティック体験



浴衣で日本人祭りに参加

9/7 国立博物館

インドネシアの歴史、宗教的な歴史を学ぶために、現地の在住日本人ボランティアの案内で国立博物館を見学した。4メートルの高さの仏像の中に、仏教とイスラム教を表す模様が描かれており、イスラム教はその宗教に固執するのではなく多様性を受け入れる宗教であることが伝えられた。学生は「宗教が混ざっており、世界史が好きだった頃を思い出して楽しかった。また、勉強したいと思ったし、インドネシアの歴史を復習してくればもっと楽しめたと思う。」と過去の学びを振り返り、これからの学びを深める意識を表現した。

また、この日の昼食で学生は、「今日、店でMサイズのカフェオレを注文したら超特大サイズのもので出てきた。しかも驚くほど甘かった。また、お茶を注文してみても、とても甘かった。それは文化であるが生活習慣病などにつながるのではないかと思った。」と話しており、食生活の比較を健康問題と照らし合わせて考えていた。

9/8 インドネシア看護師の勉強会

日本の国家試験合格を目指しているインドネシア看護師の勉強会を見学させていただいた。現地アテンド員から勉強会の開催の経過で、親日家の存在を聞いて、学生は「在日日本軍が現地人を守るために戦い方を伝え、武器を渡して永住したことで生き残ったインドネシア人がいるという説明を受けた。親日家のインドネシア人がいるのは昔の日本人の功績の一つだと感じた。」と話す。また、一緒に勉強会に参加した学生の感想として「インドネシア人は漢字一つ一つの意味を理解しようとしていた。私が漢字をフィーリングで読みながしても概要は理解していたが、具体的な意味を忘れていることに気が付いた。漢字は意味によって異なる文字を使いわけるとの違いをインドネシア人が理解するのは難しい様子で、日本で国家試験を受けることの難しさを実感した。」と自身の学びと日本の特徴を振り返っていた。



インドネシア看護師の日本の国家試験勉強会



イッサン看護学校での交流

9/9 イッサン看護大学

イッサン看護大学(IMC)では日本での研修準備学習中の学生達と交流できた。学生達と一緒に出かけたイオンモールにはお祈りする場所があり、インドネシアの学生はお祈りに行き、日本人の学生は待つことになった。学生の学びとしては「IMC 看護学生と昼ご飯を食べているときに何人かがお祈りの時間だと言ってお祈りをするとところに行った。イスラム教徒が多い国であることを実感した出来事だった。他宗教の決まりに対する理解が必要だと思った。」「ヒジャブをつけていない学生は自分のことをいい加減なタイプと話していた。イスラム教は厳しい宗教だと思っていたが、個人考え方で服装や行動が変わるので自由な宗教だと思った。また、宗教を進めたりすることも禁じているので、その人の考え方が大事にされていることを知った。」「イッサン看護大学の学生はみんなチリソースを多量に使用しており、インドネシア人との味覚の違いを感じた。」と学生との交流を通して、文化、宗教、食生活など様々な気づきがあった様子だった。

また、ホテルでも「ホテルの天井を見ると“kiblat”というステッカーが貼ってあった。調べてみるとメッカの方向を示していることが分かった。お祈りをするためにどの部屋でもある。気になってお祈りについて調べてみるとルールとしては緩い感じだった。例えばきれいなところでしなくてもいいが、絨毯をしけばどこでもよいなどあり、お堅いイメージだったイスラム教が身近に感じた。」など学生の気づきがあり、それらの気づきを学生間で共有できるように表現を促した。

9/10 インドネシア大学

インドネシア大学はインドネシア大学を卒業した学生に案内していただいた。その方の生活の様子などを聞くことができ、国の制度の違いなどを学ぶことができていた。学生は「Aさんは大学の看護学部を卒業して、看護師の試験は合格しているけど、免許の交付に時間がかかっているらしい。免許を交付されてから就職活動が始まるらしい。日本との違いに驚いた。」「学生は1カ月に4回ダンスのステージをしており、頻繁に出番がある活動をしているのに驚いた。」「学生はバイトをしないのが当たり前で忙しいと言っているが、私たちの講義よりも余裕があるような様子ではあった。」「講義の様子を聞くと、ある課題に関して最初に学生が調査、発表する。その後、その内容について教員が講義をする流れになっていると教えてもらった。その流れで講義を受けると理解が深まる気がした。」と学生生活に関する日本との違いを話した。



インドネシア大学で講義を待つ学生



ボゴール精神病院で出し物をする学生

9/11 ボゴール精神病院

ボゴール地区にある国立精神科病院（RS. dr. H. Marzoeke Magdi Bogor）を訪問した。インドネシア最大規模で最古の歴史を持つ精神科病院であった。精神科医からパワーポイントを使って、インドネシアで行われている退院支援、地域生活支援の説明があり、日本の現状が知りたいと質問があり、ディスカッションを行った。その後 病院内を見学した後、学生は患者さんの前で日本の歌などを披露した。学生は患者に対して「檻に入れられており、患者さんの表情がかたまっている様子が怖い。」「表情がない様子だったが笑顔で話しかけると一瞬だけ笑顔になる人もいた。でも、すぐに表情がない様子に変わった。日本の患者も同じような人がいると教員から聞いたが、どの国にも心を病んだ人が同じようにいることを実感した。」と話した。しかし、学生の出し物で学生が“幸せなら手を叩こう”を歌いながら体を動かすように指示すると参加したすべての患者が同じ行動をして声を出していた。学生は「歌や踊りは患者の気持ちを動かす不思議な作用がある。」と出し物をした反応が好感触であった気持ちを表現した。“上を向いて歩こう”の手話の説明し、手話付きで歌を歌うと患者さんも学生の動きに合わせて手話を行っていた。

9/12 バニサレ看護大学での交流

バニサレ大学、ボゴール診療所、クリニックと見学を行った。それぞれの場所でお菓子や果物をふるまっていたが、学生は、日本では人が話をしている時に物を食べることを遠慮する傾向にあるが、インドネシアでは食べないことが失礼に当たると言われて驚いている様子であった。

また、ボゴールクリニックに参加した学生たちは「地域で開催される1カ月に1回の母子保健に参加させていただいた。そこには、働いている人が専門職ではなく、ボランティアばかりであった。また、予防接種の値段が高いために最低でも3人集まらないと接種できない。運営費が不足しているために募金で成り立っているなどの地域特性があった。」「保健所の方と地域の集まりに参加した、その日は母子保健で、体重測定などを行っていた。予防接種もその場（外）で行うと聞き、予防接種を屋外でするにはびっくりした。」「やせすぎ、やせぎみという子供しかない状況を知り、生活水準が低いと分かった。」と観察したことについて振り返っていた。

バニサレ大学では本学の教員とバニサレ大学の教員が交互で講義を行った。本学からは、私（河野）が精神科看護の地域支援について説明した。インドネシアには、精神科に関して地域での支援がなく、家族が支援を行うのが当然と考えている。そのため、バニサレ大学の学生、教員には退院支援の必要性に納得できない様子だった。バニサレ大学の教員より「看護師はどこまで支援するのか？効果は？」と質問が出た。患者が希望することに沿った支援することであれば支援すること、患者の気持ちを知り、患者の希望に沿った支援を行えば患者に良い変化が起こると日本では考えられていることを返答した。

バニサレ大学の教員は精神科に入院する患者の拘束に関する講義を行った。入院患者の14%は拘束されていること、その患者の1人に対して爪切り、散髪、幻聴対応（耳を防ぐ）を行ったことで患者が「PCを扱う仕事がしたい」と希望し、症状が改善した症例の発表があった。

学生交流では相互に大学が所在する国や地域の特徴、大学の紹介を行った。学生は「バニサレ大学の学生は歌やダンス、浴衣体験などに積極的に興味を示していた。日本人は謙遜ではあるがイベントにも進んで取り組まない。謙遜することは日本人の美德とされているが、今日、学生たちと接して、その謙遜はやりすぎなのではないかと考えさせられた。」と話し、日本人の特徴でもあり、学生の特徴でもある側面を客観視していた。また、昼食後、終了間際にインドネシアの伝統音楽が演奏されるとバニサレ大学の学生は声を上げて喜び、踊りだした。日本の学生、教員も一緒に踊りを行って交流を深めた。



バニサレ大学で日本、大学の紹介をする学生



ボゴールクリニックの乳幼児健診

9/13 タマンサファリ

自然、動物に関わるインドネシア人の考え方の一部を観察するため、タマンサファリを見学した。動物を見ながら「蛇がモルモットを丸呑みしているのを見た。衝撃的だった。」「車でシマウマや馬、カバ、ライオン、などに餌を与えながら車で移動したが、馬やシマウマが車の中まで顔を入れてくるのに驚いた。日本では、事故が起こらないように一定の距離を保っている。それも大切だが一人ひとりが気を付ければよいのでインドネシアのようなありかたもよいのではなにかと思った。」と感想を述べた。

また、「タマサファリからの帰り道、とても渋滞していた。車が徐行していると食べ物などを売っている人たちが来た。車に乗っている人に対して商売ができるのは、渋滞がひどい国ならではのと思った。」と、連日目の当たりにしている日本との交通事情の差が生んだ商業文化について話した。

9/14 タマン・ミニ博物館

タマン・ミニ博物館でインドネシア各地のミニチュアの模型を見学しながら「バリ島 シーサーのような生き物の像が飾られており、沖縄の様子に似ていた。」「スマトラの建物の模様が白や黒、赤などで色付けされており、独特な様子だった。」と話した。

その他にも「夕食に日本で売られているものと同じように見えたカップラーメンを食べた。最初はとても美味しかったが、だんだん後味がひりひりしてきた。日本に売っている物と同じような物でもインドネシアの食べ物は辛く作られていることが分かった。現地と日本のものを比べることができた。」

「ホテルの天井を見ると“kiblat”というステッカーが貼ってあった。調べてみるとメッカの方向を示していることが分かった。お祈りをするためにどの部屋でもある。気になってお祈りについて調べてみるとルールとしては緩い感じだった。例えばきれいなところでしなればならないが、絨毯をしけばどこでもよいなどあり、お堅いイメージだったイスラム教が身近に感じた。」など学生の気づきがあった。

9/15 ジャカルタ発仁川空港経由で帰路についた。ジャカルタ 23 : 45 発、仁川空港 8 : 55 着であったため、座席での就寝であった。学生に声掛けながら状態を観察したが、空路で体調を壊す学生はいなかった。仁川空港で乗り継ぎ時間 7 時間 25 分と長時間滞在することになったので、教員が一定の場所に居る事を伝え、学生の休息場所を確保した。

11 泊 12 日の日程でインドネシア学生研修に現地指導教員として参加した。学生が現地の人々との交流を通して、インドネシアの文化や習慣の違いに触れられたので、私（河野）はその体験をその時々で学生が意識し、ラベルに記載できるように確認した。また、インドネシアは食物の衛生上の問題や治安の問題を抱えていることを事前の学習で共有し、学生の体調を確認しながら注意できる点はできる限り注意しながら研修を行った。現地でのプログラムコーディネートから世話役全般を担っていただいている小笠原氏のおかげで、学生は大変有意義な研修を体験することができ、宮崎帰着まで全員が安全に研修を終えることができた。